これだけ語句整序

多重
安定
倒置
省略

①つなぎ語は◯で囲む
②名詞は＜　＞で挟む
③動詞にはアンダーラインを引いて個数を示す数字を書き込む
④動詞が取りうる文の構造パターン（文型）を考える。
⑤つなぎ語が生み出す文の多重構造に考慮する。
⑥名詞には＜主語＞＜動詞の目的語＞＜前置詞の目的語＞の機能を割り当てる。
⑦冠詞や副詞・形容詞は後回しにする
⑧文意・文脈から攻めず、理詰め手行く。

１．語句整序問題攻略の基礎

①選択肢中の動詞に注目し、その動詞が取りうる文の構造パターン（文型）を考える。

動詞が文構造を決定する。だから、最初に注目すべきは動詞！特にＳＶＯＯ、ＳＶＯＣとその変則パターンは頻出。高２の夏期進学講座で扱った「動詞の語法」は必修だ。さらに、助動詞になりうる要素があれば、動詞より優先順位が高い。なぜなら本動詞に代わって、時制・法・態・疑問否定等の機能を引き受けるからだ。助動詞のパターンとして<be ～ to><～ to>を意識することも英文を読む上ではとても有益だ。(注 1)

②つなぎ語（接続詞・関係詞とその仲間）があれば、多重のＳＶ構造を取ることを考慮する。

つなぎ語が１つあったら、２つのＶ
つなぎ語が２つあったら、３つのＶ
・
・
・

ただし、Ｓの数は「関係詞を含む場合」や「省略を伴う表現の場合」はその限りではない。(注 2)
また、問われている空所と関わりのない部分では、つなぎ語と動詞を一つずつ消去することで問題を単純化することができる。　(注 3)

③名詞には＜主語＞＜動詞の目的語＞＜前置詞の目的語＞の機能を割り当てる。

動詞の次は名詞を特定する。それぞれの動詞の主語、目的語の候補を選び出す。名詞以外の品詞にもなれる語（同形異品詞）には注意が必要。名詞が１語だけしか与えられていない場合は、当然それが主語。
such, all, some, one, many, much など

④冠詞や副詞・形容詞は後回しにする

動詞を決定して初めて＜主語＞＜目的語＞等の名詞が決まる。冠詞や副詞・形容詞はそれから考えればよい。特に「前置詞＋名詞」が形容詞になるのか副詞になるのかをじっくり考えること。また、後置修飾語句にも注意！

⑤文意・文脈から攻めず、理詰め手行く。

語句整序問題は英語独特の表現が試されることが多い。だから文意・文脈から攻めると概して上手く行かない場合が多い。日本語が与えられている場合には、それに引きずられて＜主語＞の選択を誤ることが多い。特に「無生物主語構文」、「させる系の他動詞」には注意が必要。

■注１

助動詞は本動詞に代わって、時制・法・態・疑問否定等の変形義務を引き受ける。だから直後に来る動詞は原形になり変形義務から解放される。そして助動詞のもう１つの役割は、動詞に味付けをすることだ。<can>ならば、「～できる」と言う味を動詞に加えるわけだ。この助動詞の持つ役割を<be ～ to>や<～ to>も果たしてくれる。

will = be going to
can = be able to　→　<be ～ to+原形>

<will>は助動詞なのだから、ほぼ同じ意味を持つ<be going to>も助動詞と考えて差し支えはない。<can>にもまったく同じ事が言える。この２つには共通要素<be ～ to+原形>が含まれているので、<be ～ to+原形>の型を全て助動詞と捉えることにしてはどうか。上で述べた文法的な変形義務は<be>が果たしてくれるし、to 不定詞の直後は当然原形になる。例えば<be scheduled to ～>であれば「～する予定である」の味を動詞に付けるのだから<will>や<be going to>と変わらない。

must = have to　→　<～ to+原形>

これは少々乱暴な考え方だが、<will>同様、<must>が助動詞ならば、ほぼ同じ意味を持つ<have to>も助動詞と考えて悪いはずはなく、ならば<～ to+原形>の型を取る表現を助動詞と捉えようと言うわけだ。

want
hope
wish
desire
plan
mean
offer
agree
desice
determine
promise
refuse
} to+原形

少々乱暴だと書いたのは、助動詞の２つの機能の内、「動詞に味付けする義務」は果たしてはいるが、「文法的な変形義務」は<do><did><does>の手助けなしには果たせないからだ。しかし、このくらいの不具合を割り引いても<～ to+原形>を助動詞と捉える価値は充分にある。

「英文が読める」とは「その英文の中から動詞が指摘でき、その動詞が取る文型が分かる」ことだ。省略や倒置で起こる語順異常は別にして、英文の主語を捉えるのは比較的簡単だ。英文が前置詞から始まる場合、それは文頭副詞であり、直後に単独の名詞を探し当てればそれが主語。文頭が単独の名詞から始まればそれが主語。場合によっては<that+文>とその仲間、<to ～>、<-ing>が主語になる場合もあるが、それでもたった３つのバリエーションに過ぎない。一方、動詞はそう単純にはいかない。主語の直後に動詞が来ればありがたいのだが、主語に長い飾りがついていたり、挿入句が割り込んでいたりして、動詞が捉えにくい場合が少なくない。クイズの質を高めるために、悪文スレスレの複雑な英文を意図的に発掘してきて陳列したのが入試英語だ。

助動詞の直後には必ず本動詞が来る。<will><shall><can><may>だけでなく、<be ～ to><～ to>を助動詞だと捉えることで、その直後に目を転じさえすれば動詞を簡単に見つけることができるのだ。

■注２
富田の公式は「つなぎ語の数＋１＝動詞の数」なのだが、「ＳもＶと同じ数じゃないか。Ｓの数にも法則性があるのでは？」と思っている者がいるかも知れない。

<I>	know	a lot of people
S	V	O

who live in New York

上の例では、つなぎ語は<who>１つ。だから動詞は＋１で<know>と<live>の２つ。でも主語は<I>１つだね。この様に関係代名詞がつなぎ語で、飾りの文の中の主語が関係代名詞化した場合（主格の関係代名詞）、Ｓは飾りの文から消滅してしまうことになる。やはり文を決定づける動詞じゃないと間に合わない。

また、第４日目でも扱うが、「接+Ａ＝Ｂ」での「Ａ＝」の省略を考えても主語の数は当てにならないことが分かると思う。＜名詞＞は文中で「主語」「目的語」「前置詞＋名詞」など様々な役割を与えられる。一方動詞は原則１文に１つしか割り振れないわけだから、動詞に着目することは至極当然なことだ。

■注３
講義では「消去の法則」と呼んでいたもの。英文が長くなると、つなぎ語が複数個出てくる場合が多い。つなぎ語２つまでは苦にならないが、３個以上出てくると、もう何が何だかわからなくなる（某人文語学組生徒）。クイズに解答するのが目的なのだから、空所から外れた部分に煩わされるのは時間の無駄。そこで、「動詞」「つなぎ語」を一つずつ消し去っても計算に狂いはないのだから、問われていない部分にはこの「消去の法則」を適応するのが賢い。

~~V~~
~~and~~
~~V~~
~~and~~
V
and
V

例えば下のような問題の場合、動詞<can't speak>とつなぎ語<and>とを１つずつ消去しても、状況は変わらない。

I can't speak French, and (　　)(　　)(　　)(　　).
① brother>　② neither　③ can
④<my　⑤<younger>

＜例題１＞白百合女子大・国文・英文
In the year 1798, (　　)(　　)(　　)(　　)(　　) faster than the food supply and that this would lead to widespread starvation and suffering.

① an economist　② that <the world population>
③ was growing　④ named Thomas Malthus
⑤ warned

In the year 1798 (an economist)(named Thomas Malthus)(warned)(that the world population)

(was growing) faster than the food supply and that this would lead to widespread starvation and・・・
→１９７８年、トマス・マルサスという名の経済学者は、世界の人口は食糧供給量を上回る速さで増加しており、その結果、広範囲に渡る飢餓と困苦に見舞われるだろうと警鐘を鳴らした。
・文頭副詞は完結している。
・動詞の候補は<was growing>と<named Thomas Malthus>と<warned>の３つ。
・ただし、④は<name →何を→どの様に>の第５文型を取ってないので、これは過去分詞の可能性が高い。
◎等位接続詞<and>が出てくれば問題は半分以上解決する。左右がきれいな対称形になるからだ。
◎つなぎ語<and>の取り扱いには注意が必要。ここでは後半の<and that this would 〜>から<and that>を１つのつなぎ語と数えなくてはならない。(注４)
・つなぎ語は②の<that>と後半の<and that>の２つ。動詞は＋１で３つなくては成らない。
・動詞候補は４つあるので、３つは動詞で１つは動詞の皮をかぶった別物。④はやはり過去分詞だと分かる。
・主語候補は<an economist>しかない。続く動詞は<was growing>か<warned>のどちらかだが、<and>の対称性を考えると<that+文>を目的語に取る<warned>しかあり得ない。②<that the world population 〜>に続く動詞は<was growing>。
・<named Thomas Malthus>の位置を最後に決定する。

■注４
等位接続詞<and>は文法機能上左右対称形を取る。しかし、いつも左右に動詞が来るとは限らない。「名詞 and 名詞」「副詞 and 副詞」には当然動詞は含まれないので、つなぎ語があっても動詞の数は増えない。また、例題１は等位接続詞 and が<that+文>をもう１つコピーするだけだから、<and>をつなぎ語の１つとして数えては計算が合わなくなる。

<an economist>	warned 1	that <the world population> was growing ~~and~~ 2 that <this> would lead 3
<S>	V	<O>

さらに厄介なことに、例題１の様な場合、コピー元の that が省略される場合もある。
She said [**that**] she would agree and that she would go with me any day.
→彼女は、了解しているのでいつでも一緒に行きますと言った。
こう考えると、「富田の法則」は非実用的な愚則と成り下がるのだが、語句整序でそこまで複雑な問題は出題されない。等位接続詞が出てきたら、「動詞 and 動詞」と「文, and 文」の場合にだけつなぎ語として勘定に入れること。そして等位接続詞が従える左右対称形を大いに利用して文を組み上げることだ。

＜例題２＞１９９７年度センター試験・　本試・問２Ｃ(3)

As the next century approaches, (　　)(　　)(　　)(　　)(　　) for them to survive.
1

① are attempting　② be needed　③ some companies
④ to find out　⑤ what will

, (some companies)(are attempting)(to find out)(what will)(be needed) for them to survive.

→次の世紀が近づくに連れ、生き残るために何が必要かを見つけようとする企業がいくつか出てきた。
・消去の法則を使い、完結している副詞節のつなぎ語<As>と動詞<approaches>を消し去る。
◎助動詞候補に着目すると、<are attempting to 〜>と<what **will**>。この直後の動詞パターンを推測する。
・<are attempting>は<to find out>、<what will>は原形の<be needed>。
・文頭に来る疑問詞以外、what はつなぎ語になる。(注５)
・主語になれる名詞候補は<some companies>と<what will 〜>の２つ。

■注５
what+文には次の可能性しかない。

① What surprised me most was a huge rock.　(関係代名詞の what)
② My girlfriend asked me what I wanted.　(疑問代名詞の what)
③ Do you know what time the train will arrive?　(疑問形容詞の what)
④ The statesman gained what support he needed.　(関係形容詞の what)

(　)の中の文法用語は無視すること。授業で言っている様に、関係代名詞の what は「こと・もの what」、疑問代名詞の what は「ことシリーズ」の仲間と考えて良い。③④の様に what の直後に名詞が来ると、その名詞を飾っているわけだから、「〜形容詞」と呼んでいるだけだ。what をつなぎ語と考えると動詞の数の計算が合うのが分かるね。

＜例題３＞慶応大学

Soccer gives us a simple pleasure and has always been one of the easiest games to play.　A ball on the ground has something (　　)(　　)(　　)(　　)(　　) it.

① about it　② makes you　③ that
④ to kick it　⑤ want

A ball on the ground has something (about)(it)(that)(makes you)(want)(to kick) it.

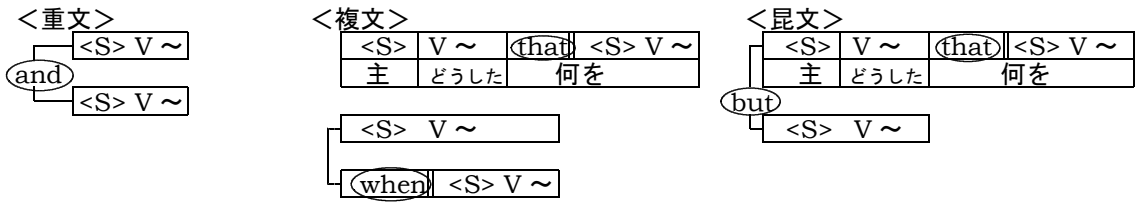
→サッカーは僕らに手間のかからない楽しみを与えてくれ、いつでも簡単にプレイできるゲームの１つだった。グランドに置かれたボールには、どこか人に蹴りたくさせるところがある。
・２文から成るが、空所を含む英文だけを検討する。
・文が前半で完結している（ＳＶＯ）。後半の空所群は副詞か、<something>を飾る形容詞かのどちらか。
・動詞候補は②<**makes** you>と⑤<want>。既存の<has>を考えると全部で動詞は３つ。
・<that>がつなぎ語になるので、動詞候補３つのうち２つには動詞の役割を割り振れる。残り１つは動詞の皮を被った別物。
◎<makes>が取りうる文の構造パターンを考える。その際に<want>や<to kick>の役割も考慮すると<makes you want to kick it 〜>に思い当たる。
・<about it>は形容詞か副詞なので最後に考える。
★次の表現が狙われる！

There is something about A that 〜
A have something about A that 〜

There is something about her that excites me.
She has something about her that excites me.
彼女には何かしら僕を刺激するものを持っている。

２．つなぎ語によってできる多重構造

語句整序の醍醐味はなんと言っても「重文」「複文」「昆文」構造。単文だと構成要素が少なくて、面白いクイズが作成できない。もちろん単文も出題はされるのだが、知らなくては解けない語法や構文が扱われていることが多く、レベルの低い問題となってしまう。



ここで１つルールを定めよう。上図にも施したが、①つなぎ語は◯で囲む、②名詞は＜ ＞で挟む、動詞にはアンダーラインを引いて個数を示す数字を書き込む。クダラないルールだが、同じ手続きを用いて戦略的事にに臨むことはとても大切だ。手続きにばらつきがあると、なぜ失敗したのかの理由(Reasoning)を総括する時に特定することがむすかしい。なんとなく上手くゆき、なんとなく間違えることを繰り返していては、上達などおぼつかない。「１．語句整序問題攻略の基礎」でやった①〜⑤手続きを毎回必ずふむこと。

つなぎ語としてこの講座でとり上げるのは次の４つ。
①従属接続詞の that（ことシリーズ）とその仲間である「疑問詞＋文」および「what+文」
②等位接続詞の and
③複合関係詞
等位接続詞 nor は倒置表現でしかクイズにならず、for や so は文と文しか結ばないので当然つなぎ語だと分かる。but と or は今回の講座では詳しくは扱わず、等位接続詞の左右対称性に力点を置いた。その他の従属接続詞である if, when, before などは見ただけでつなぎ語だと分かる。以下、順につなぎの機能と注意事項を解説することにしよう。

２－①つなぎ語＝従属接続詞のｔｈａｔ

＜例題４＞早稲田大学・一文

<The first thing> (　　)(　　)(　　)(　　)(　　)(　　).
1

① has nothing　② it　③ to do with him
④ is　⑤ that　⑥ to be explained

The first thing (to be explained)(is)(that)(it)(has nothing)(to do with him).

→先ず説明しなくてはならないことは、それは彼とは何の関係もないと言うことだ。
・主語<The first thing>が与えられている。
・動詞候補は<has nothing>と<is>。③⑥には助動詞<be to 〜>と結びつく可能性もあるが、つなぎ語が that １語なので、動詞は２つあれば充分。ここで<be to 〜>の可能性を除外する。
・主語候補と結びつく動詞を特定する。<The first thing has nothing to do with him.>では後が続かない。
・従って<The first thing is 〜>。<it has nothing>の組み合わせしかないことが分かる。
・③⑥の<to 〜>の役割は、形容詞か副詞。
・③⑥の両者共に名詞<thing>と<nothing>を飾る形容詞であることに思い当たるか？

★次の表現が狙われる！

S	is	that 文
A	=	B

The[形容詞]thing is that 〜
My guess is that 〜
What I mean is that 〜
The question is that 〜
The reason is that 〜
What+文 is that 〜

このパターンは数え切れないくらいある。まとめても仕方がない。

＜例題５＞２００１年度センター試験・本試問２Ｃ③

In her letter, Paula seems (　　)(　　)(　　)(　　)(　　) and study abroad.
1

① saying　② she wants　③ that
④ to be　⑤ to quit her job

In her letter Paula seems (to be)(saying)(that)(she wants)(to quit her job) and study abroad.

→手紙の中で、ポーラは仕事を辞めて留学したいと言っているようだ。

・主語<Paula>はすでに与えられている。<**she** wants>も２つ目の主語候補。
・助動詞<seems>は主語が<It>ではなく<Paula>なので、<seems to 〜>のパターンしかない。(注６)
・また<she wants 〜>は助動詞<want to 〜>となる可能性を考える。(注１)
・すると動詞候補は<study><to **be**><to **quit** her job>の３つ。つなぎ語は<that>と<and>の２つだから計算が合う。
◎等位接続詞<and>の直後には動詞<study>があるので、「動詞 and 動詞」だからつなぎ語と考えて良い。(注 4)
・後半の<and study abroad>に注目して、<and>が結ぶ同じ形である動詞の原形を探して<and>の直前にも配置してやることになる。

■別解

<seems to 〜>はともかく<wants to 〜>を助動詞と考えるのに抵抗のある者もいると思う。また④<to be>や⑤<to quit her job>を動詞候補とはせずに、後回しにしたいと考えるのは自然な発想だろう。そんな子のために別解を用意した。
・主語<Paula>はすでに与えられている。<**she** wants>も２つ目の主語候補。
・助動詞<seems>は主語が<It>ではなく<Paula>なので、<seems to 〜>のパターンしかない。
・<She wants 〜>の直後は<to be>か<to quit her job>。
・<and study aborad>が左右対称形になり文意が通るには、<she wants to **quit** her job and **study** abroad>しかない。<She wants to be saying 〜>では文が続かない。
・ならば前半は<Paula seems to be saying that 〜>

■注６

<seem>の使い方は次の３通り。
① It seems that she is beautiful.
② She seems to be beautiful.
③ She seems beautiful.

発想としては、
① It seems that+文。
②文に助動詞 seem to を加える。
③ be 動詞をそっくり seem と置き換える。
詳細は「これだけ英文法」で。

★次の表現が狙われる！

S	V	that 文
主	どうした	何を

＜例題６＞１９９９年度センター試験・追試・問２Ｃ②

From (　　)(　　), (　　)(　　)(　　)(　　) could be the correct answer.

① I was　② none of the choices　③ provided
④ sure　⑤ that　⑥ the information

From (the information)(provided), (I was)(sure)(that)(none of the choices) could be the correct answer.

→与えられた情報から、どの選択肢も正解ではあり得ないと確信した。

・コマ(,)までが文頭副詞。
・動詞候補は③<provided>と①<I **was**>で、空所直後の<could **be**>を含めて３つ。
・動詞が複数あるので、<that>をつなぎ語にせざるを得ない。つなぎ語は１つだけなので、動詞は２つでなくてはならず、<I was 〜>と<could be>は動詞当確だから、③ provided は動詞の皮をかぶった狼。
・つなぎ語 that を割り当てるには<I was sure that 〜>しかない。
・残った名詞は<the information>と<none of the choices>で、一方が前置詞 from とつながり、もう一方がつなぎ語<that>が導く文の主語になる。
◎最後に残った<provided>は動詞でなければ過去分詞。１語だけでも後置修飾に気が付けばＯＫ。(注７)

★次の表現が狙われる！

人	is+ 形容詞	that 文
主	どうした	何を

人　is　{ afraid, fearful（心配）
sure, confident, certain, convinced（確信）
eager, anxious, keen, desirous, hopeful（熱望）
aware, ignorant（知・無知）
proud（誇） } that+文

＊「anxious」の使い方には注意が肝要！！「心配する」にはこの用法はないことに注意。
I am anxious about her health.（心配）
We are all anxious that you [should] return.（切望）
=We are all anxious for you to return.

■注７
形容詞１語でも後置修飾される場合がある。
①「-thing」「-body」「-one」で終わる名詞を飾る
②「-able」「-ible」で終わる形容詞
③「お決まり文句」＝「all the people present」「a baby asleep」
④「分詞形容詞」＝「twenty people arrested」「the information provided」

２－②ブリブリ注意すべきつなぎ語＝等位接続詞の and

＜例題７＞中央大学・理工

1

You could do an interesting comparison (　　)(　　)(　　)(　　)(　　) and how it was in the eighteenth century.

① between　② is　③ like now
④ the town　⑤ what

You could do an interesting comparison (between)(what)(the town)(is)(like now) and how it was 〜

→その町の現在の様子と１８世紀の様子とを比較したらおもしろいだろうね。
・文は前半で完結している（ＳＶＯ）。
・<and how it was 〜>に注目する。「動詞 and 動詞」ではなく「疑問詞+文 and 疑問詞+文」なのだから、<and now>を１つのつなぎ語と数える。
・動詞候補は<could **do**>、<it **was**>、②<is>の計３つ。つなぎ語は<what>と<and how>の２つだから計算が合う。
・等位接続詞<and>は文法機能上対称形を結ぶので<疑問詞+文>が直前になくてはならない。
◎ならば「what<S >+V 〜」を先に組み立てることを考えるのが得策。左右対称形にするのだからコピー元である後半の「疑問詞＋文」をじっくり観察すること。

{ what <S>　V
and
how <it>　was　in the eighteenth century

・主語候補は<the town>、動詞候補は<is>でガチガチの選択。
・「what A is like」と「how A is」が同じ表現であることが分かる？(注８)

■注８
「what A is like」は「how A is」にいつでも書き換えられない。間接疑問文ではわかりにくいので、
① What is your new school like?　新しい学校はどうですか？
② How is your new school?　（意味不明）
③ How do you like your new school?　新しい学校が気に入った？
④ How is your new school life?　新しい学校生活はどうですか？
「How 〜?」は本来行動プロセスを尋ねているのだから「How is +名詞?」では②の様に意味不明となる場合が多い。意味が少々変わっても良いならば③を用いるべきだろう。④の「school life」の様に名詞に行動プロセスが含まれる場合は文が成立する。上の中央大学の問題を振り返ってみよう。
A: What is the town like now?　その町の様子は今はどうですか？
B: How is it in the eighteenth century?　その町の様子は１８世紀ではどうでしたか？
<the town>にプロセスはないが<in the eighteenth century>には一定期間の行動プロセスが含まれている。だから中央大の英文は見事に成立しているわけだ。受験英語の弊害の１つに「what A is like」=「how A is」などの公式化された書き換えパターンがある。言葉がこんな公式で単純化されるわけはナイのにね。

★次の表現が狙われる！
「疑問詞＋文」は「that+文」と同じ「ことシリーズ」だと考える。
I know **where** he is from.　「かれがどこから来たかと言う**こと**」
I wonder **how** the fire started.　「どの様にして火事が起こったかと言う**こと**」
I will tell you **what** I want.　「僕が何をしたいかと言う**こと**」

「間接疑問文」と言う呼称もあるが、「ことシリーズ（従属接続詞 that に導かれる名詞節）」と文中での機能に変わりはない。<what>が「関係代名詞」か「疑問代名詞」かの区別は実際に運用する上では無意味だ。
What I want to know is **what** you want.
僕が知りたいのは、君は何が欲しいかと言うことだ。
最初の what は関係代名詞、２つ目の what が疑問代名詞なんて区別はクダラナイ！

＜例題８＞２００２年度センター入試・本試・問２Ｃ①
Since my secretary didn't take the name of the visitor, I couldn't (　　)(　　)(　　)(　　)(　　).

① see　② be sure　③ me
④ who　⑤ had come to

Since my secretary didn't take the name of the visitor, I couldn't (be sure)(who)(had come to)(see)(me).
→秘書が尋ねてきた人の名前を聞かなかったので、誰が私に会いに来たのかはっきりしなかった。
・消去の法則を用いて、つなぎ語<Since>と動詞<didn't take>を消し去る。
・助動詞は空所直前の<couldn't>と⑤<had come to 〜>の２つで、直後には原形が来る。(注９)
・動詞候補は①<see>と②<**be** sure>の２つで、つなぎ語は<who>１つだから計算が合う。
・助動詞＋動詞の原形の組み合わせを考えると、<I couldn't see me 〜>では意味不明だから、<I couldn't be sure 〜>しかあり得ない。(★次の表現が狙われる→<who+文>も<that+文>の仲間)
・ならば、つなぎ語<who>以下が I couldn't be sure の目的語となり、その可能性は<who had come to see 〜>しかなくなる。

■注９
「come to 〜」「get to 〜」「learn to 〜」は「〜になる」の意味の助動詞と考える。
① We came[get] to know each other two years ago.
② She learned to ski last winter.

①私たちは２年前に知り合いました。
②彼女は去年の冬にスキーができるようになりました。

＜例題９＞１９９８年度センター試験・追試・問２Ｃ②
Bill was knocked unconscious (　　)(　　)(　　)(　　)(　　) he came to his senses.
1
① and　② before　③ from a horse
④ in a fall　⑤ it was several days

Bill was knocked unconscious (in a fall)(from a horse)(and)(it was several days)(before) he came to 〜
→ビルは馬から落ちたときに強打して意識を失い、気がつくまでに数日かかった。
・前半で文が完結している（ＳＶＣ）。
◎等位接続詞<and>が従える左右対称形は、<in a fall and from a horse>と「文 and 文」しかないが、<in a fall and from a horse>は一見するときれいな左右対称形ではあるが、「落下の時に and 馬から」となり意味不明。すると残るは「文 and 文」のはずだから、<and>はつなぎ語。
・動詞は、<Bill **was** knocked 〜><it **was** several 〜><he **came** to 〜>の３つ、つなぎ語は<and>と<before>の２つだから計算が合う。
・⑤<it was severaldays>から「It is+[期間] before+文」に思い至ればＯＫ.
・飾られる名詞がないので、前置詞＋名詞の<from a horse><in a fall>の役割は副詞以外にはない。

★次の表現が狙われる！
It is +[期間] before +文　＝　〜するまでに[期間]かかる
この表現が定着しないのは、学習参考書の扱いに問題がある。
It will not be long before 〜
It will be a long time before 〜
美誠社の『英語の構文１５０』でもこの２つしか扱っていない。これでは適応範囲が限られてしまう。

２－③つなぎ語＝複合関係詞
＜例題１０＞２００２年度センター入試・追試・問２Ｃ①
You can look through your textbook and choose (　　)(　　)(　　)(　　)(　　) for your essay.

① you　② want to　③ topic
④ whatever　⑤ write about

You can look through your textbook and choose (whatever)(topic)(you)(want to)(write about) for your essay.
→教科書に目を通して、どんなことでも君がレポートとして書きたいものを選びなさい。

・等位接続詞<and>の直後に注目する。原形の動詞<choose>があるので、<and>が結ぶものはやはり原形の動詞である<look through>だと分かる。ならば「動詞 and 動詞」で<and>はつなぎ語。
・つなぎ語は<and>と<whatever>、動詞は<and>が結ぶ<can look>と<choose>の２つと⑤<**write** about>で計３つ。これで計算が合う。
◎複合関係詞<whatever>は形容詞で使うか名詞で使うかに注意する（「whatever+名詞」か「whatever」か）。
You may do **whatever** you like.
You may read **whatever book** you like.
・名詞<topic>は普通名詞なので単独では存在できず冠詞や飾りを必要とする。だから<write about topic>にはならない。すると、<whatever topic>の「whatever+名詞」でしかその役割を果たせない。

★次の表現が狙われる！
関係代名詞の「what」同様、複合関係詞「-ever」も先行詞を含み名詞節を導く。だから「that+文」と機能は何も変わらない。関係詞はどうしても形容詞と言うイメージが強いので見誤りがちだ。<whatever>も立派なつなぎ語だと認識することが大切。

I	believe	**that** you said so	君がそう言ったこと（＝事実）
		what you said	君が言ったこと（＝内容）
		whatever you said	君が言ったすべてのこと（＝君がいうことは何でも）
主	どうした	何を	

特に複合関係形容詞と呼ばれる「whatever [whichever] + 名詞」を混ぜ込めば語句整序問題の難易度を簡単に上げることができる。例題７の「★次の表現が狙われる」をまとめ直しておく。

I know **where** he is from.　「かれがどこから来たかと言う**こと**」
I wonder **how** the fire started.　「どの様にして火事が起こったかと言う**こと**」
I will tell you **what** I want.　「僕が何をしたいかと言う**こと**」
I believe **whatever** you said.　「君が言った全ての**こと**」

＜例題１１＞１９９７年度センター試験・本試・問２Ｃ②
Unfortunately, (　　)(　　)(　　)(　　), (　　) was one step ahead of us.

① fast　② he　③ however
④ ran　⑤ we

Unfortunately, (however)(fast)(we)(ran), (he) was one step ahead of us.
→残念ながら、僕らがどんなに速く走ろうとも、彼の方が一歩先んじていた。
・コマ(,)に注目する。複合関係詞とコマが同居する場合は、譲歩で「たとえ～しようとも」。
・動詞候補は<**was** one stop ～>と④<ran>の２つ、つなぎ語は③<however>１つで計算が合う。
・後半の動詞<**was** one step ～>の主語になるのは<he>しかない。
・ならば<however+形容詞・副詞>を考慮して前半の空所を組み上げれば良い。

★次の表現が狙われる！
譲歩の副詞節を導く場合は比較的簡単だ。コマ(,)を境に文が２つにはっきりと区切れるので語句を組み立てやすいからだ。複合関係詞<however>は①「however+形容詞/副詞」か②「however S+V」のどちらか。圧倒的に①の用法が多い。

① **However much** she eats, she never gets fat.
② **However** you do it, the result is the same.